

[009\_1982]第九回中央図書館貴重文物展観目録：幕  
末から明治初期にかけての英語辞書および英文典：  
文学部所蔵日本英学筑紫文庫より

九州大学附属図書館中央図書館

大江, 三郎  
九州大学文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/16162>

---

出版情報：大学広報. 430, pp.1-11, 1982-01-11. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 大学広報

№.430

昭和 57 年 1 月 11 日発行  
(編集)  
九州大学広報委員会

## 第九回図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

幕末から明治初期にかけての英語辞書および英文典  
— 文学部所蔵日本英学筑紫文庫より —

教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、展示資料の選定、解説、配列等について文学部大江三郎教授に多大の御  
尽力と御指導を頂きました。ここに厚く御礼申しあげます。

記

展観場所：中央図書館メインロビー

展観期間：昭和57年1月11日(月)から

昭和57年2月10日(水)まで

展 観 資 料 の 解 説

幕末から明治初期にかけての英語辞書および英文典

—— 文学部所属日本英学筑紫文庫より ——

今回の展観のために選ばれた資料は幕末から明治初期までに出た英語辞書の代表的なもの（その中<sup>①</sup>二点は実用英文典の性質をも強くもつ）と、最も古い英文典二点である。これら資料が選ばれた文学部所蔵の「日本英学筑紫文庫」は、九州大学名誉教授（法文学部英文学講座の初代担当教授）であった故豊田實博士の寄贈になる日本における英学、あるいは広く洋学の歴史、さらにはその後の日本における英語英文学研究の初期の歴史に関する一大コレクションであり、1774年の『解体新書』に始まる和書洋書あわせて約3,300冊からなる。

これら古い英語の辞書や文典は外観や内容の珍しさの故に、また編著者の中にこの時期の歴史と切り離せない西周、福沢諭吉、アーネスト・サトウの名がみられるという点で興味をそそる。しかし、（もちろんこのことと深い関係があるのだが）日本における英学の発達のための土壌として明らかに蘭学があったこと、またこの動乱の時期に、今日の精密な英語辞書発達の萌芽がすでにはっきりと認められることを示す点で、これら資料は非常に興味深い。

1. 諸厄利亚国語和解 全3冊 文化8年(1811)  
アンゲリヤ わげ

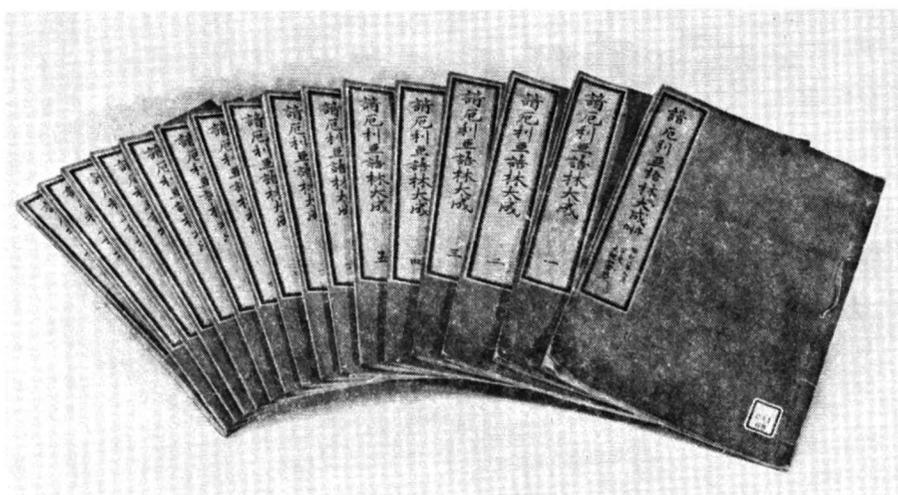


諸厄利亚とはイギリスのことである。この書は写本10巻からなり、文化8年(1811)春完成したわが国最初の英学書、あるいは英和辞書といえる。内容は、英語の単語と会話にかたかなで発音を記入し、日本語訳をつけたものである。（ただし単語は全体の $\frac{1}{3}$ にみたな

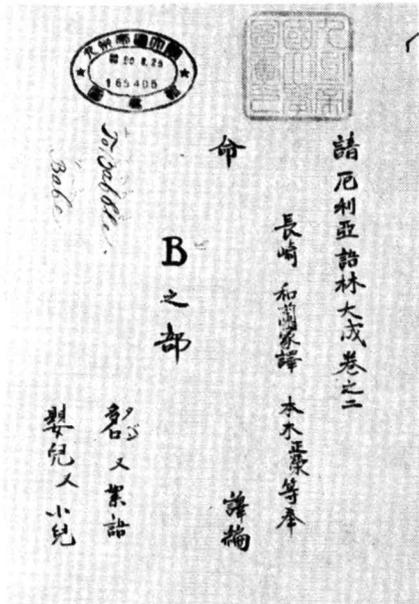
い。)東京帝国大学付属図書館にあった本書の10巻本は大正12年の関東大震災で焼失したが、一方、長崎市役所にあった本書の3冊本は著者、本木庄左衛門正栄の自筆本であったといわれる。ここに展示されているのはこの原本の写本である。著者の本木はオランダ大通詞であり、他の通詞とともにその中心となって、英語の知識を有していたオランダ人 Jan Cock Blomhoff (当時の長崎オランダ商館副役)に師事、それがきっかけで本書ができた。本書完成の背景には、外国語としてはオランダ語しか知られていなかった当時の日本に、英国船渡来の際生ずるであろう誤解、混乱を防ごうという国防の動機があった。

2. 諸厄利亚語林大成 全16冊 文化11年(1814)

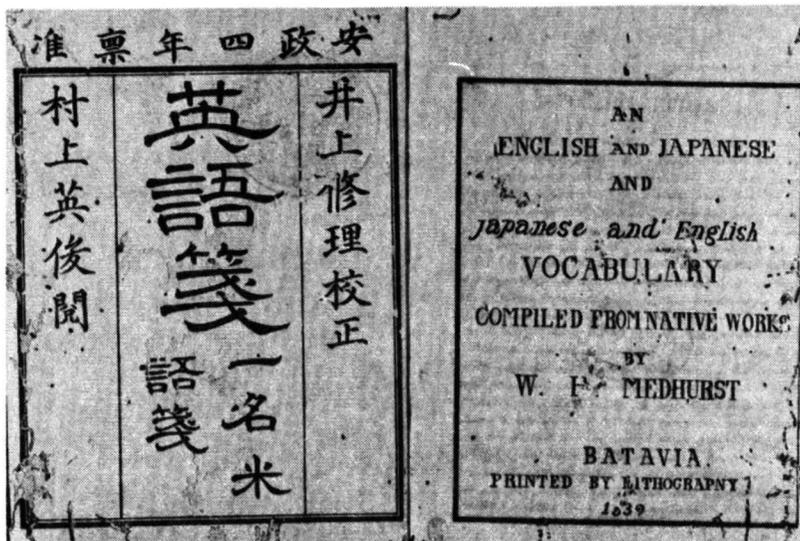
アングリヤ

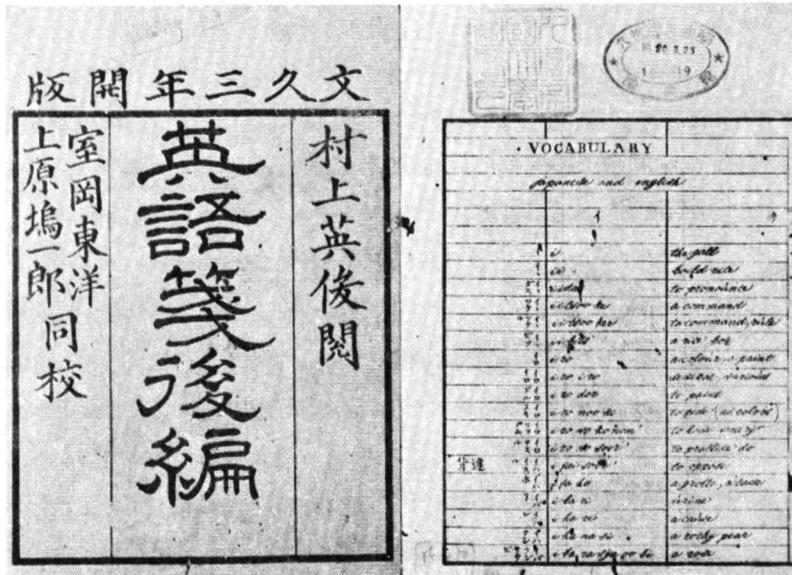


『諸厄利亚国語和解』が単語と会話の書で、単語も決して網羅的に収められてはいないのに対して、この書は収録語数約6,000、英和辞書としての内容と形式をはっきりと有する最初の書である。やはりオランダ人 Blomhoff に師事したオランダ通詞がその編に当り、責任者はやはり本木正栄であった。文化9年脱稿、文化11年夏完成といわれる。内容は英単語の横にかたかなで発音を記入し簡単な訳を施したもので、前書同様発音や文字の書き方にオランダ語の影響が明らかにみられる。長崎市役所にはこの辞書の本木正栄の自筆本が二部あり、その一方(第一冊が欠ける)には、英語の横にオランダ語が添えてあったとのことである。ここに展示されるのは大槻本(国語学者の故大槻文彦博士が明治10年頃東京の書店で発見されたもの)の写しで、序文1巻と本文15巻よりなり、本文は巻之一A之部、巻之二B之部のようになっている。



3. An English and Japanese, Japanese and English Vocabulary. By  
W. H. Medhurst 天保元年 (1830)





オランダ系に対してこれはイギリス系の英語辞書であり、しかも直接イギリス人の編纂になるものである。編者であるイギリス人宣教師Medhurst(1796-1857)は日本へ来たことも日本人と話したこともなかったが、日本から数人の人がもたらした漢字まじりの書物を参考にし、自らの漢字の知識を頼りにしてバタヴィアでこの辞書を編纂し、英語も日本語も知らない中国人に書き写させたものを石版印刷にした。英和の部分ではアルファベット順でなく部門別に単語を配列しており、例えば始めにUniverse(宇宙)の部が来る。第二の和英の部分では単語がイロハ別に配列されている。Medhurstは東アジア通で、『中国語、朝鮮語、日本語比較語彙』を著わし、また中国語の辞書や聖書の中国語訳をも著わしている。

英語箋 前編 3冊 安政4年(1857)

“ 後編 4冊 文久3年(1863)

これはMedhurstの辞書(バタヴィア版)の翻刻出版である。

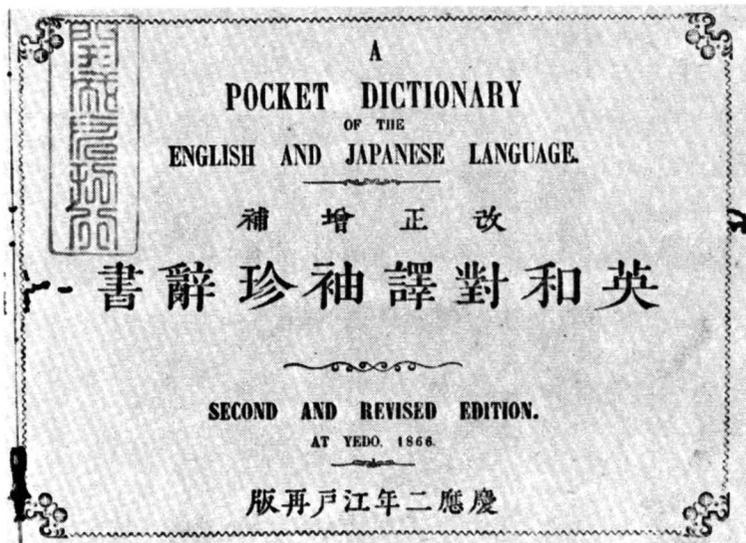
4. エゲレス語辞書和解 全5冊 嘉永4-7年(1851-4)

嘉永3年幕命により西成量を中心とする長崎の通詞によって着手され、同7年の末までにA之部とB之部の一部ができたところで中止された。A之部4冊、B之部の途中まで3冊で計7冊であったが、A之部第1、2冊が欠けている。ここに展示されているのは長崎にあったものの写本である。英単語の横にかたかなで朱書された発音と、簡単な訳語が付けられている。発音の表わし方にはそれまでの辞書に比べて若干の改善が認められる。

5. 華英通語 万延元年(1860)

万延元年、福沢諭吉が幕府の使節に随行サンフランシスコに渡ったとき、清の人、子卿の著『華英通語』という英単語と会話の本を手に入れ、日本人のためにこれに発音と意味をかたかなで書き添えて同年帰国後発行した。辞書というよりは実用英文典の色彩が濃い。なお原著の漢字による発音表記も残されており、面白い。発音では新工夫としてVをヴ、ヅで表記しており、またnとんの違いに着目、例えばwindを「ウキヌド」とするなどヌを用いている。福沢の外国語を聞く耳のよさを示唆するものであろう。

6. 改訂増補：英和对訳袖珍辞書 慶応2年(1866)



オランダ系英語辞書のそれまでのものは長崎の通詞の手になるものであったが、これは江

戸で出た。編纂に当たったのは江戸の洋書調所の教官、堀達之助、西周助(西周)等である。(西周(1829-97)は幕末、維新时期の啓蒙思想家である。津和野藩医の子で1853年江戸に出、脱藩して蘭学を学んだ。1862年にはオランダに留学している。また中浜(ジョン)万次郎等に英語も学んでいる。)この辞書がまだ不完全ながら画期的といえるのは日本でできた活字本の最初の英語辞書だという点である。底本はH. Picard, *A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages* (1857年版)の英蘭の部である。洋書調所はこの辞書の出た翌年開成所と改称されたため、この辞書も「開成所辞書」として知られるようになった。内容的に目立つのは、各語にS(実名辞)、v. a. (他動辞)、v. n. (自動辞)など、品詞の指定が与えられている点である。

### 7. 薩摩辞書(和訳英辞書) 明治2年(1869)

鹿児島藩士高橋新吉がイギリスに留学している友人の同藩士の手紙に刺激され、やはり薩摩の人前田献吉、その弟正名とともに開成所辞書(展示6)を底本とし、宣教師Verbeckの援助をも借りながら作ったもので初版は上海のAmerican Presbyterian Mission Pressで印刷された。この辞書が開成所辞書と異なるのはかたかなで発音を表わしたこと、訳中の漢字の多くにふりがなを付けた点である。この辞書発行の目的の一つはこれら薩摩人の海外渡航へのやみがたい希望をみたすことであったが、実際この辞書発行がきっかけで三人とも洋行が実現している。これが一般に「薩摩辞書」と呼ばれるのは、英学の必要性を力説した序文の末尾に「日本・薩摩学生」という記名があるからである。

大正増補:和訳英辞林(薩摩辞書2版) 明治4年

薩摩辞書の再版であるこの辞書も印刷は上海で行なわれた。ただこの明治4年版の画期的特徴は発音表記にウェブスター式の符号を採用したことであった。そのこともあって英語の表題が前の薩摩辞書がEnglish and Japanese Dictionaryであったのに対して、これはEnglish and Japanese Pronouncing Dictionaryとなっている。また単語数も初版に比べて増加しており、アメリカ式綴りも示されている。以上のことについては次を比較するとよい。

(初版) <sup>ヤハラー</sup> Centre s. 中  
 (再版) Cēn'ter Cēn'ter s. 中

### 8. 和英語林集成 明治20年(正訂第二版)

この『和英語林集成』は我が国におけるはじめての本格的和英辞書として、我が国におけ

る英語辞書発達史上最も重要な位置を占める。著者は有名なアメリカ人宣教師で明治学院を創設した教育者 J. C. Hepburn (1815-1911) (一般にヘボンと呼ばれ、漢字では平文と表わされる) で、初版は原著名を *A Japanese and English Dictionary: with an English and Japanese Index* といひ慶応3年(1867)に上海の American Presbyterian Mission Press で印刷された。この名が示すとおり和英辞書であるけれども巻末に英和の部がある。明治5年にやはり上海から出た増補版は原名もとどめた上で *A Japanese-English and English-Japanese Dictionary* と改名され、和英の部のみならず英和の部もかなり収録語が増加された。慶応3年の初版も筑紫文庫に含まれていたのであるが、現在非常に残念なことながら散逸してしまっており、ここに展示できるのは明治20年に大阪の日盛館から出た翻刻版の再版である。初版の扉は縦書で右側に「美國平文先生編譯」左側に「一千八百六十七年 日本横濱梓行」とあった。この展示本の扉と比較していただきたい。この辞書の緒言によれば彼が参考にしたのは例の1830年の Medhurst の辞書および、古く1603年にイエズス会宣教師の著わした日葡辞書であるが、実質は彼自身の努力の結晶といえる。彼は日本語の材料を主として会話からとったが、日本語語彙のために『古事記』『源平盛衰記』『平家物語』などまで調査している。和英の部の構成は日本語のローマ字、かたかな、漢字による表記、次いで品詞の指示、英語の訳語、となっている。この辞書で日本語の表記に用いられたローマ字がいわゆるヘボン式ローマ字で、主要部分は今日も用いられており、その点でも非常に重要である。

#### 9. 英華字彙 明治2年

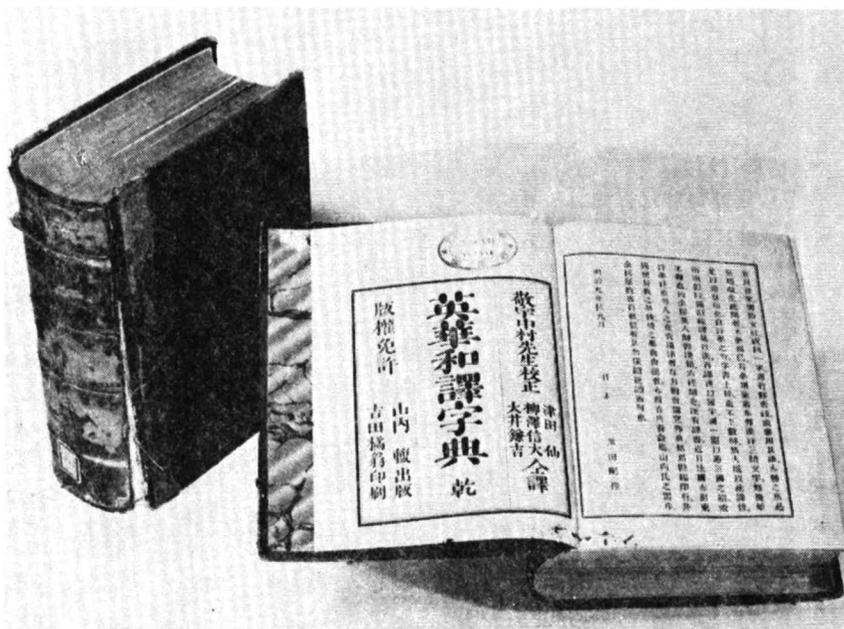
日本は開国がおくれたため、日本における英学の発達は直接間接中国に負うところが多く、英語辞書にもそのことが反映されている。『英華字彙』はまさにこのような中国系の英語辞書で、印刷経営の宣教師として中国へ渡ったアメリカ人 S. Wells Williams (スウェルズウエレン士) の *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect* 英華字彙部のみをとり、それに序と凡例を書いた柳沢信大が訓点を施して翻刻したものである。ロンドンなどで出版された英華辞典はすでにこれより前にあり、長崎のオランダ通詞によって利用されていたが、この辞書は日本で初めて上梓された中国系辞書として意義がある。

#### 10. 附音挿図英和字彙 明治6年

これはイギリス系の中でも英人が直接上梓したものではなく既成の John Ogilvie の英語辞書に依拠するものである。Ogilvie はスコットランド出身でいくつかのウエブスター系

の辞典を著わしている。またその特徴の一つは銅版さし絵を含むことであった。この『英和字彙』はOgilvieの辞書のいずれかの短縮版によったといわれさし絵を豊富に含む。発音表記も当然かなではなく英語に則したものになっている。この辞書が明治初年までの英和辞書中最もすぐれたものであることは明らかで、非常に広く用いられ、後の英和辞書に及ぼした影響は大きい。編者は柴田昌吉と子安峻である。柴田は長崎の地役人馬田永成の六男として同地に生まれたが、後、同地の町医師柴田家の養子となった。親戚にオランダ通詞がいたとのことである。子安は大垣藩士で、大阪で村田蔵六(大村益次郎)の家塾に入り、後、佐久間象山について砲術を学んだ洋学者であり、明治7年には読売新聞を創刊した。

11. 英華和訳字典 全2巻 明治12年



これは中国系に属し、4巻の大辞書 *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation*, by the Rev. W. Lobscheid, Hongkong, 1866-69の抜粋和訳であり、2冊に製本されている。この辞書の編者の一人には『英華字彙』の編者、柳沢信大がいるが、そこでは単に訓点が施されていたにすぎないのに対し、この方は漢訳とともにかたかなとローマ字で和訳が加えられており、所々英語の訳も添えられている。例えば home の一つの意義の説明として one's own country、本国、ヒトノシャウコク、hito no shō-kokuのごとくである。

12. *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language.* By Ernest Mason Satow and Ishibashi Masakata 明治12年(第2版)

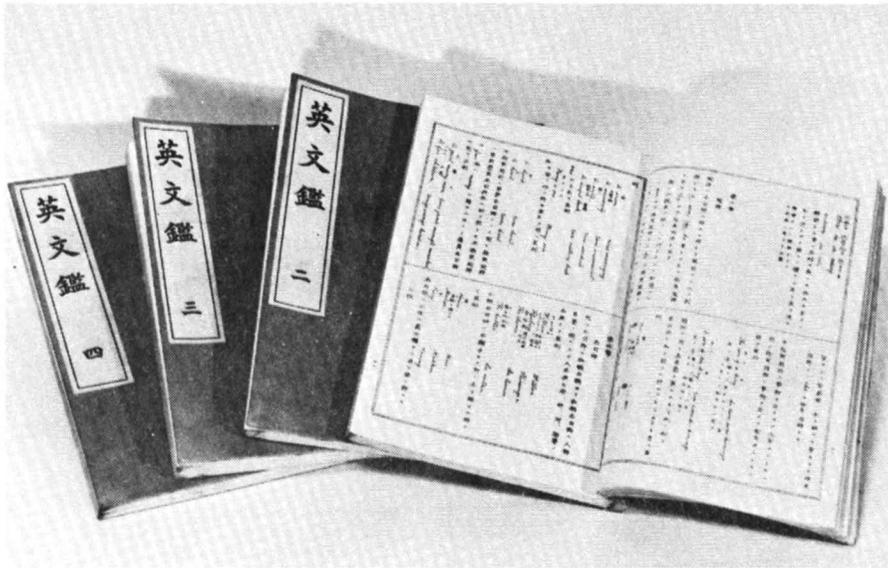
幕末から明治維新期に日本で活躍した有名なイギリスの外交官アーネスト・サトー(1843-1929)が編者になっている点で注目すべきである。彼はロンドンの生まれで大学在学中書物とおして日本にあこがれを抱き、イギリス外務省通訳生試験に合格、日本駐在となった。従って当然日本語の知識も相当なものであった。この辞書は序文もいうようにアメリカの辞書(ウェブスターとヘボンのもの)にも影響されているがやはりイギリス系とみなせる。発音はなく、綴りは一切イギリス式、訳はローマ字で書いてある。初版は明治8年に出たが大半が焼失したので若干の改訂増補を行ない、第2版を明治12年に出した。出版はいずれもロンドンである。もう一人の編者、石橋政方は長崎のオランダ通詞で英語を学んだ人である。英語の知識はかなりあったようで、すでに1860年には簡単な英単語集も著わしており、サトーの協力者として適任だったようである。

13. 明治英和辞典 明治17年

アメリカ系の英語辞書はヘボン系とウェブスター系とに二分される。ヘボンの系統の辞書は和英が主であり、英和辞典にはウェブスター系の伝統が強い。この『明治英和辞典』は、この展示本では欠落している緒言に「ウェブストル氏所著ノNational Pictorial Dictionaryヲ以テ主トナシ・・・」とあったとのことで明らかにウェブスター系である。訳は簡潔ではあるが正確でかなり網羅的であり、後の英和辞書に大きな影響を及ぼした。

14. 英文鑑 全4冊 天保11-12年(1840-41)

天保11年から12年にかけて、江戸の天文方見習澁川六蔵敬直は『英文鑑』上、下2巻の写本を幕府に献上したが、これはLindley Murrayの英文典のオランダ語訳からの重訳である。原著者Murrayはペンシルヴェニアに生まれ、後、イギリスに移住した人で、彼の書いた文法書はイギリスや他のヨーロッパ諸国でも広く用いられ、日本における英学だけでなく、英文法一般の歴史でも彼はよく話題にされる。我が国最初の英和辞書として展示してある『諸厄利亜国語和解』が実質的な英文典としての側面をもつことは指摘したが、これを除けばこの書をもって我が国初の英文法書とみなすことができる。英語の例文に逐語的に日本語の単語が並べられ、それから日本語の訳が与えられている。そしてオランダ語訳もそのまま保持されている。訳者の澁川は蘭学のかたわら英学に志した非常な秀才であったがある事件がもとで豊後の白杵に幽閉され1851年37才で没した。補助者としての藤井質は加賀藩



医の子であり、1847年に『英文範』を著わたとされているがその著は今残っておらず、人物についても詳細は不明である。

15. Gemeenzame Leerwijs, Voor <sup>n</sup>degenex, die de Engelsche Taal begin-  
en te leeren 安政4年(1857)

安政4年は関心の中心が蘭学から英学へと移行したという点で、我が国における洋学研究史上重要な年であるが、事実この年数種の英学書が出版になった。このGemeenzame Leerwijs (一般学習書)もその一つで、英語学習初心者のための手引書としての目的をもつR. van der Pijl 著の蘭英対訳語学書(H. L. Schuld による増訂版)の翻刻である。この書が日本語を介さぬ対訳書であり、この種の翻刻版が多かったということは、英学が少なくとも出発点ではすでにあつた蘭学の土壌に根ざす形で生じたという事実をよく反映している。